

透析医療のイメージ

(社) 日本透析医会
常務理事 山川智之

透析医療は末期慢性腎不全という致死的な疾病に冒された多くの患者を社会復帰に導く輝かしい実績を持つ、唯一普及した治療として成功した人工臓器である。こと日本においては多くの先人の諸先生のご努力により優れた世界に冠たる治療を実現している。

その大きな実績を築き上げてきた透析医療においては新参者である若手(?) 医師として、透析医療がその功績ほどには評価されていないのではないかと、ここ最近感じることが多い。

透析に費やされる医療費は国民医療費の4%に上り、これが全国24万人弱の透析患者の命を支え、透析医療機関および周辺業界をも支えている。透析医療は高額医療の代表として矢面に立たされ、度重なる保険料改定で単価は削られながらも、なおこれだけの公費を透析医療費に投入しているという事実は、日本においては腎移植が普及せず腎機能代替療法の選択肢に乏しいという事情はあるにせよ、ある程度の評価は受けていると言ってもいいのかもしれない。もっとも糖尿病性腎症の増加や高齢化に伴うコスト上昇については十分な配慮がされているとは言い難く、要介護透析患者や通院困難な透析患者については、制度的にも現状にそぐわない部分が多くあり、結果的に各医療機関の持ち出しで対応せざるをえないこともしばしばある。これは正常な状態とは思えず、やはり現実に制度を合わせてもらうのが本来のあり方であると思われる。

一方で、透析関係者以外の医師からの評価についてはどうだろうか。一つの現実として標榜科目としての透析科が未だに実現されていないという状況がある。これは様々な歴史的な経緯などはあるにせよ、周囲から見て透析医療が一つの医療のカテゴリーとして認められていない、ということなのだろう。残念なことである。

私の病院に新たに透析に取り組みたい、という方々が見学に来られることがこれまで何回かあった。そのような方々の一人である民間病院のオーナーは、透析医療に参入する理由を聞くと「土地があるから」と答えられた。とにかく透析をやればそれでうまくいく、という発想なのだろうか。

確かに透析はほかの診療と違い患者の自己負担はほとんどなく受診抑制の心配はない。しかし、ちゃんとした透析医療を行い経営を成り立たせることは決して簡単なことではない。設備投資は大きく、また熟練したスタッフの確保は不可欠であるし、透析医療を知る医師の確保も簡単ではない。血液透析施設が供給過剰になりつつある都市部において患者を集めるのはそれほど簡単ではなくなりつつある。透析患者の増加に頭打ち傾向が顕著になるであろう今後はより厳しくなると思われる。

加えて透析歴の長い患者においては骨関節症の合併はほぼ必発であり、また新しい患者においては心血管系合併症の患者が激増し、またブラッドアクセスの困難な患者も増えてきている。どれも決して対策が容易なことではない。透析を新しくやりたいという施設は、われわれでも苦慮して

いる合併症対策をどのように考えているのだろうか。

甘い見通しに基づく開業や参入はモラルと医療レベルの低下を招く。レベルが下がれば参入障壁はより低くなり、透析医療のイメージは悪化する。イメージが悪化して危機的な状況を招いた企業は数多い。私は透析医療がそうなることを恐れる。質の高い透析を行い、やはり透析医療というのは敷居が高いのだ、ということを示すことが透析医療のイメージを守ることであり、透析医療そのものを守ることではないだろうか。

今後の透析医療の問題の一つとして後継者の不足があげられている。個人的にもそれは切実な問題であることを実感している。やはり透析医療が大きな志をもって取り組める魅力的なイメージを持った医療であってほしいと切に願う。同じ医療を志す同世代の仲間が少ないというのはやはり寂しいものである。